

『愛欲の檻-トラウマボンド-』

著: 妃川 螢

ill: 海老原由里

紳士服のカタログから抜け出てきたかのような、面白みはないが隙のない着こなし。質の高いものを身につけていながら、それをひけらかさない謙(けん)虚(きょ)さは、背負った肩書ゆえに意識的にまとった印象だろう。

その奥に垣(かい)間(ま)見えるのは、ゆるぎない自信とプライド。

かたちのいい眉の下の瞳には、清(せい)廉(れん)な光。

己の内に、たしかに存在する嗜(し)虐(ぎゃく)的(てき)嗜(し)好(こう)をくすぐってやまない魅力的な存在はしかし、誘いをかけるにはあまりにも危険すぎる肩書の持ち主だった。

「お忙しいところ、捜査にご協力いただきまして、ありがとうございました」

向かいに腰を下ろしていたインテリ然とした美貌の主は、静かに腰を上げると、実に優雅な仕種で一礼をする。

テーブルの上には、彼から渡された簡素な名刺が一枚。その横には、冷めたエスプレッソ。

「お気になさらず。日本国民でなくとも、警察に協力するのは一般市民の義務です」

投資に絡(から)む詐(さ)欺(ぎ)事件の捜査をしているのだという。話を聞かせてほしいと訪ねてきた警(けい)視(し)の肩書を持つ捜査官は、外国籍を持つ自分に対して気遣いを見せこそすれ、微(み)塵(じん)の疑念も向けてはいなかった。

「少しでもお役に立てたのでしたら、何よりです」

彼にならって腰を上げ、手を差し出す。その、いかにも日本人的な行動を米国籍の自分がしてみせたことに、彼は少し驚いた様子でゆるく目を瞠(みは)った。

「そう言っていただけで助かります」

堅さの残るビジネスライクなものではあったが、口許に笑みを浮かべてみせる。そのぎこちなさが胸に湧いた感情をざわめかせ、禁(きん)忌(き)の言葉を紡がせた。

「お食事でもいかがですか？」

せっかく知り合えたのだからと、さりげなさを装えば、見据える瞳に浮かぶ困惑。

——警戒させてしまったか。

「せっかくですが、勤務中ですので」

返されたのは、わかりきった応(いら)えだった。

「残念です。ではまたの機会に」

言葉を発するまで、彼の手を握ったままであったことに気づかなかった。力を抜けば、今まで手のなかにあった熱が去る。あたりまえのことを惜しむ自分にひっそりと苦笑した。

硬質な靴音を響かせ立ち去る細い背。

それが視界から消えるまでを、冷めたエスプレッソを口に運びながら見送った。

鼓膜に戻る、午後のカフェの喧(けん)騒(そう)。

それに紛(まぎ)れて届いたのは、隣のテーブルに背中合わせに座る男の声だった。

「警官に誘いをかけてどうする。本国を離れているからといって、気を抜くな」

英字新聞を広げる、ブラウンの髪にブラウンの目の、特徴のない外国籍の男。外資系企業のオフィスビルが立ち並ぶビジネス街にあるこのカフェでは、珍しくもない光景だ。

「わかっているさ。だが——」

言葉の先に、惜しむニュアンスを感じ取ったのだろう、背後の気配が陰(けん)呑(のん)さを帯びる。

「同性愛はご法度だ」

諫(いさ)める言葉。

己が何者であるかを、忘れてはならない。

「掟(おきて)破り、か」

呟(つぶや)いて、手にしていたカップをソーサーに戻す。テーブルの上の名刺を、胸ポケットにおさめた。

事をなし遂げるまでは、気を緩めてはならない。

それは結果として、己の命を危うくする。

だがそれでも、ときに沸き立つ想いがある。

危険を承知で手を伸ばしたくなる、抗(あらが)いようのないこれは、いったいなんと名づけられる感情なのか。

「己の死にざまを間違えるな」

手厳しい指摘には、「わかっているさ」と口許に自(じ)嘲(ちょう)を浮かべる。冷めきったエスプレッソはただ苦いだけの液体だ。

すぐ隣のテーブルに、ふたり連れがマグカップののったトレイを置く。それを合図に、ふたりは会話を止めた。店内に満ちる喧騒のなか、再び他人に戻る。

ややして、背後の男が席を立った。

その肘(ひじ)が、肩に当たる。

「失礼」

「いや、お気になさらず」

他人のあいさつ。

折りたたんだ英字新聞を手に、ブラウンの髪にブラウンの目の、地味な外国人はカフェを出ていった。残されたのは、黒髪にアイスブルーの瞳の、見る者が見れば一目で金を余らせているとわかる、派手な容貌の男。

オーダーもののクラシコイタリアのスリーピースに、ダイヤをはめ込んだタイピン、限定生産の腕時計。上質なものをさりげなくまとえる背景(バックグラウンド)。世界経済が疲弊しきっても、関係なく金のまわりつつける世界があることを、その存在だけで知らしめる。

「管理官殿……か。別の場所で再会したいものだ」

叶うことなら…と、コーヒー一杯すらおごらせてはくれなかった白磁の美貌を思い出しつつ呟いて、男は口許に笑みを刻む。

ガラス張りのカフェに差し込む陽射しは、北緯四十度に位置するニューヨークとは、あきらかに違って感じられる。東京の緯度は三十五度。たかだか五度の差だというのに。

早朝の住宅街。

朝練があるのだろうか、大きなバッグを担(かつ)いだ体格のいい学生や、出勤時間の早いサラリーマンなどが、まばらに駅へと向かう。人通りはまだまだ少ない。

そんな、日本全国どこでも見かけるありふれた街並みのなかに、紛れようとして紛れきれない異質な存在——近隣住民のものではない車両が、街の随所に停車している。そのなかの一台。

通信機器などがひそかに装備された車両内には、ふたりの男。

ドライバーズシートには若い青年が、助手席にはスリーピーススーツをピシリと着こなしたステアリングに身体をあずける青年よりはいくらか年上のインテリ然とした男が、ともに厳しい表情で身体を沈ませていた。

年上らしいインテリ然とした男は、色素の薄い髪に白い肌、意志の強そうな眉と、だがその下の明るい色の瞳は長い睫(まつ)毛(げ)がつくる影によってトーンを落とし、ストイックさの際立つ風貌に、危うい艶(つや)を残している。一方の年若い青年も、テレビに映るアイドル俳優に交じっても遜色のない風貌で、道行く人が気づけば、いったい何者かと訝(いぶか)ることだろう。その表情が陰しいがゆえに、なおのこと。

両者ともに、耳にはイヤホンを仕込んでいる。

外からは見えないが、ジャケットの内側には、ホルスターにおさめられた拳銃。

窓の閉められた車内に響くのは、雑音混じりの通信音。

『突入班、配置完了』

『メーター確認しました。まわっています』

『風呂の窓が開いています。室内の明かり確認』

スピーカーから聞こえるのは、現場からの報告——刑事たちのやりとりだ。

一見長閑(のどか)で普段と変わらない様子の住宅街には今現在、数十人の捜査員が配置されている。

銃刀法違反の罪で逮捕状を取った犯人の潜伏先に、まさしくこれからガサ入れ——家宅捜索に入ろうとしているところだった。

どこにでもある二階建てアパート。その一番奥の部屋が摘発対象者(マルタイ)の潜む部屋だ。

玄関ドアの上に設置された電気メーターがまわっている。その動きが待機電力によるものではなく、室内で電気が使われていることを示すものであるのを確認して、たしかに室内にある人の気配を、現場を囲む突入班の刑事たちは感じ取っている。

本文 p11～17 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>